仏道の意味①

本願寺派布教使・行信教校講師 山本攝叡先生

“もし善男子・善女人、五念門を修して行成就しぬれば、
畢竟じて安楽国土に生じて、
かの阿弥陀仏を見たてまつることを得。”
―『無量寿経優婆提舎願生偈』

「仏道」ということを少し考えてみたいと思います。厳密には違うのでしょうが、「菩薩道」という言葉で言い換えてもいいかなと思います。

日本人は「～道」が好きです。「柔道」「剣道」「華道」「茶道」……どこかで「ゴルフ道」という言葉も聞いたことがあります。これらの「～道」というのは、「歩んで行く道」ということでしょう。

「菩薩」とは、どういう意味であるかご存知でしょうか。「菩薩」という漢字を見ても意味がありません。サンスクリット語「ボーディ・サットヴァ」の音訳です。「ボーディ」というのは「悟り」、「サットヴァ」というのは「衆生」という意味です。つまり「悟りを求めて歩んでいる人」のことを「菩薩」というのです。

皆さん方は菩薩道を歩んでくださっていますか。「そんな難しいのは私ら無理やから…」と、とんでもない道を歩んでいらっしゃるのではないでしょうか。

立松和平という作家が、道元禅師を主人公にした『道元』というかなり長い小説を書かれています。ずいぶん前に買って読んでいなかったのですが、最近読み始めました。

道元禅師という方は、大変高貴な家柄のお生まれです。道元禅師は若い頃、『「一切衆生悉有仏性（みんなあらゆるものに仏性がある）」と言うじゃないか。あらゆる衆生に仏性が備わっているのだったら、何のために我々は道を歩んで修行をしなければならないのか。もうそのままでいいのではないだろうか』と疑問を持たれます。いろんな方を尋ね、その問いを出されます。栄西さんにもその問いを出していかれるのですが、なかなか納得のいくような答えが出てこなかったのです。

そこで道元禅師は、その時代の中国、宋の国へ渡ったら、その問いに答えてくれる人、本当の仏道を教えてくれる人がいるのではないかと思い、宋の国へ渡られます。道元禅師の時代は、かなり航海術も進歩していて、もっと昔の遣唐使の頃と比べると、だいぶ安全に渡っていけるような技術がありました。星を見たりしながら進んでいく方向を求めていくのですが、それでも当時の船で宋の国まで行くというのは命がけのことでした。

しかしその時、道元禅師は「怖いとか、死ぬのが嫌だとかは一切思わない」とおっしゃるのです。仏法を学ぶために、その命を失ってもそれはそれで本望だったのではないでしょうか。

2021年3月1日「正宣寺春季彼岸会」より

YouTube「浄土真宗本願寺派 光寿山 正宣寺」チャンネルにて配信中